

現場に生きる

挾 土 秀 平

私が29才～30才の2年間、箱詰めになって働いていた、メンバーズ棟18階、パブリック棟12階という、低層階がRC造、高層階はS造のリゾートホテル。

30才～34才のおよそ4年と半年は、もう記憶が定かではないが、総工費約400億という、それはコンクリートの巨大なRCの美術館にどっぷりと浸かっていた時代を、よく自分の強烈な人生の一部として思い出すことがあります。

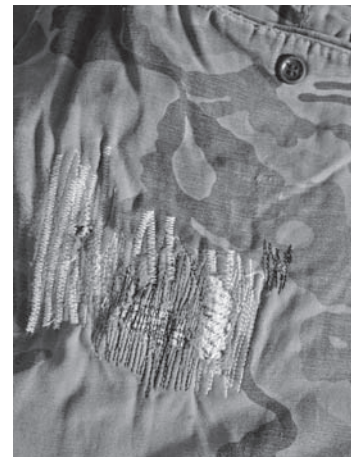
当時、岐阜、愛知の左官業界では、飛騨の高山にいる田舎の小さな左官屋のあととりだが、まだ若い職長で、どうにもならず強気で、あいつを野放しにはしておけない……そんな風のウワサが、本人である自分に伝わってくるほどでした。

その様子は、現場内のコンクリートの躯体の柱に、秀平のバカヤローと、どこかの業者の誰かが墨指して記した落書きが数か所に書かれている、そんなエピソードもあります。

私が愛用していたのは、「晴姿」「五女子」という、12枚ハゼの地下足袋に、迷彩柄の7分という乗馬ズボン。膝下にゴムバンドをして、安全帯の腰にクギ袋にさしたハンマーをゆらゆらさせて、ヘルメットをかぶり、数十人の職人を現場にひきつれて仕事をしていました。



写真—1 迷彩柄のズボン



写真—2 迷彩柄のズボン

今思うと、自分は18～35才頃までの十数年間、まさにコンクリートの建設現場に荒く生きていたといっても過言ではありません。しかし、ただ荒くいるだけで現場は通りません。

振り返ると、それはまさに多種多様な職種とその組合せ、自分の前後に関わる他業者の仕事をどう読むか、すなわち現場の工程とセメント(セメントモルタルや、コンクリート)に向き合ってきた長い経験が、今の自分にしみ込んでいるように思います。その中で、特に建築の精度や強度、そしてその現場に関わる人間のレベルを決定づけるものが、コンクリート打設に集約されています。

コンクリート打設は木造建築に例えると、棟上：いわゆる建前というにふさわしく、その現場の様々な職種が、このひとつの作業に関わった共同作業といえ、鉄筋コンクリート造の現場では、主たる職種として、まず躯体3職＝型枠大工、鉄筋工、土工、そこに左官工の職長の私が、ここは俺が仕切るとばかりに、スラブのコンクリート金ゴテ仕上に登場します。

昔の床モルタル金ゴテ仕上は、浮きやクラック、コスト面から消え、コンクリート直押工が主流となると、ゼネコン側は、コンクリートの床の精度を、いか

にしてあげるかが重要なテーマとなり、プラスマイナス5mmなんて言う数字を言うものの、実際には、そんな簡単なものではなく、コンクリート打設が手作業である限りは、永遠の課題といってもいいくらいに、難しいものです。ただ、少しでも良い躯体とスラブ精度を求めて、ゼネコンをうならせる打設を行うことが、強気でわがままで荒くれていても、その現場をリードする職長として君臨できる方法だということを、この29才～30才にリゾートホテルで体感しました。

ざっとこんな調子に……。コンクリート打設の朝、私はまず、コンクリート圧送車の配管がどうされているかに目を配らせます。コンクリートが通る配管は、とんでもない重量の振動が、足場を揺らすほどガンガンと音をたて圧送するだけに、スラブ断差をつけている浮き型枠の上に当たってないかどうかを見て、「おいポンプ屋、配管が型枠に当たりそうぞ！俺もお前も、レベルをみてある型枠を信じてコンクリートを入れてゆくのだから、気をつけろ！それに、もっと気を使って、鉄筋のスペーサーを倒さずに歩けないのか！」すると大工と鉄筋工は、自分が指摘しなければならないことを、左官の私が、自分のことのように怒鳴っているから、ニンマリとして……

逆にポンプ屋は、私から怒鳴られてムツとしていますが、今度はあの重い重い10mはあろう圧送口のホースを、龍の体のように使って動かし、壁型枠の中に圧送してコンクリートを入れている中では、型枠大工や鉄筋屋や土工に対して、「おい！ポンプ屋は、躯体に発生するコールドジョイントやジャンカを作らないために考えて打設しているんだから、バイブレーターや躯体たたきの人間は、もたもたせずに、その筒先を確認しながら、どこをコンクリートが流れているのか、ついていなきゃダメじゃないか。」と、また怒鳴りつけています。

朝から晩まで、1日500m³をこえる打設は、生コン車のコンクリートも、水セメント比がばらついているような場合も感じられ、今度は現場監督に、「おい！どこ見てんだ！このコンクリート、本当にスランプ18か！やけに水が多いぞ！プラントに電話するとか考えろ。」ようやくスラブを打ち始めた頃には、日が落ち始めて、ポンプ屋も早く帰りたいのか、スラブに入れるコンクリートをどんどん早めて、左官や土工が平均にならるのが追いつかなくなると、「ストップ、ストップだ！」と大声をあげて、ポンプ屋に、「お前！こんな打ち方で、プラスマイナス5mmなんていう精度で出来る訳ないだろう！今度からお前は出入り禁止だ！文句があるなら、どっちの意見が通る

か、現場所長のとこいってこい!!」と、またまた怒鳴り声をあげて……。高層階になればなるほど、ポンプ屋は、ポンプ車にかかる負担を考えると、打設を長く止めるほど、車のダメージやコンクリートつまりの原因となる為、わかったわかった、と泣き顔になるほどです。

……しかしやがて、私がただやみくもに突っ張っているのではないことが、現場内に浸透しはじめると、「今日のコンクリートは、やつが来たからうるさくなるぞ！」と、皆が受け入れながらも、その場がピンと張りつめます。それは、建設の仕上の段階でも同じ調子で、やがて時代が進むごとに、今では、安全面が一番重要なテーマになってきています。

私は10年ほど前、職人社秀平組設立という転機を迎え、今では、現場コンクリートに立つことは、ほぼなくなりました。しかし、この大きな現場での長い経験が、今、非常にものを言っています。

まさに今、建築は、スピードやコストや品質の安定を求める結果、建築から水を、すなわち、湿式の工法を極端に排除する形式に変わってしまいました。しかし、何やら建築が水を失うことで、〈縦〉〈横〉〈長さ〉のみとなって、何度傷つけても、補修をしたり取り替えたりできるという雑な感覚になってきたように思えてしまいます。すなわち、切る、貼る、打つといった平面的な方法になって、おなじ空間でも〈縦、横、長さ〉+時間（湿式工法ならではの乾燥期間やタイミング）の豊かさが消えつつあるように思えます。水を使う仕事は、絶妙な塩梅が大変必要で、実はこの塩梅こそが、我々日本人特有の繊細さや緻密さの源になっているのだらうと思えるのです。

今、私の仕事は、土壁という、水をなくしてはありえない施工の中で、東京都内の大きな建設現場で、その施工を求められることがあります。その時いつも現場側は、私は何も知らないアーティストだと思って迎え入れますが、ゼネコン側は、とても簡単な感覚で土壁が出来上がるような勘違いも多分に感じられて、下塗り、中塗り、上塗りが5日間ほどで出来上がる予定となった工程表が、当たり前のように組まれていたり、塗り壁工事の下地を作る場合でも、何度説明しても、現場に行ってみると必ずといって良いほどに、乾式仕様の下地が作られているくらいです。

本来は、塗り壁の下塗りを、工程の中でいち早く入れ、その乾燥期間の間に天井や柱や床の業者との段取仕事を優先させたり、次に中塗りをさせて、またその間に塗装や天井ぎれのフクビ等を入れさせて上塗りをさせて、乾燥後に養生をして、床工事を進める……と

いう掛け合いのような絶妙なパズルを組むような……時間を読むことができません。乾式的な大突貫の建築全般の流れの中で、塗り壁の施工を無事終えることは、自分たちの技能以前に、その現場を読まなければ、その環境が整わないことがしばしばです。

今、湿式の象徴的な塗り壁の表現を、なんとかできている事……それが、あのコンクリート打設や大きな現場で生きていた経験が、自分を助け生かされていること。スピード優先の時代の中で、我々の絶妙なタイミングを要する仕事を成功させてきた事は、あの荒くれたコンクリート打設が支えているのだと、しみじみ感じています。



写真一六 洞爺湖サミット



写真一三 ペニンシュラ東京 フロント



写真一七 益子 土祭



写真一四 ペニンシュラ東京 階段室



写真一五 ペニンシュラ東京 階段室

JCM A

[筆者紹介]

挟土 秀平 (はさど しゅうへい)
職人社 秀平組
代表取締役